

「無敵の人」

小早川
魁斗

登場人物

現代

佐々木 理玖 (9) 吃音を患っている。
佐々木 真子 (34) 理玖の母。
佐々木 亮輔 (36) 理玖の父。
中山 姫花 (9) 理玖のクラスメイト。
徳山 洸平 (34) 自殺を考えている。

回想

佐々木 真子 (9) 吃音でいじめられている。
徳山 洸平 (9) 真子のクラスメイト
高田 太一 (9) 真子のクラスメイト。いじめっ子。

○マンション・佐々木の自宅・玄関（夕）

エプロン姿の佐々木真子（34）、顔を歪めている。

真子M「やっぱり、私の子だ」

土間に立つ佐々木理玖（9）、顔を押しさえているが、赤黒く腫れた大きな痣は隠せていない。

真子「…何があったの」

理玖「いっ…いや。だ大丈夫」

と、軽く吃る。

靴を脱ぎ部屋に上がろうとする。

真子「ちよつと待って！」

と、理玖の腕を掴む。

真子の気迫に動揺する理玖。

理玖「もーなに？」

真子「何があったのか言って」

理玖「…」

と、下を向き黙り込む。

真子「見せて」

と、理玖の手をどかし、顔を覗き込む。

真子「誰がこんな酷いことを……！」

と、驚きの表情。

理玖「ももっ……もういい?!」

と、真子を振り解き自室に入っていく。

真子「ちよっ……！」

と、心配そうな表情。

○同・居間（夜）

食卓には食べかけの夕食と、空いたビ

ール缶が1本。

ほんのり濡れ髪の佐々木亮輔（36）、

2本目のビールを煽る。

真子「ねえ。わたし話あるって言ったよね？」

と、対面に座る。

亮輔「おれも色々あんのー」

と、立ち上がり、冷蔵庫に向かう。

真子「ちよっ、飲み過ぎじゃない？」

亮輔「今日あんま飲んでないからさ」

真子「え、飲んできたの？」

亮輔「……」

と、気まずそうに、3本目のビールを
開ける。

真子「もう…！」

亮輔「…それで？」

真子「ああ…見た？理玖の顔」

亮輔「ああ、ありや当分痛いだろうな」

真子「なんとかしなきゃいけないよね…」

亮輔「ん？」

真子「てかき、言ったよね？」

亮輔「…なにをよ」

と、身構えながらも、ビールを煽る。

真子「…いじめられる可能性があるって」

と、真剣な表情。

亮輔「いじめかどうかは分からんだろ」

真子「でももしそうなら？」

亮輔「…」

真子「理玖は私と同じなの。あなたも知って
いるでしょ」

亮輔「…ん…」

と、困ったように頭を掻く。

× × ×

卓に亮輔、真子が並んで座り、対面に
仏頂面の理玖が座っている。顔にはガ
ーゼを貼っている。

亮輔「黙ってちゃ分からん」

理玖、下を向いている。

亮輔「理玖、こっち見ろ」

と、理玖を見据える。

理玖、そっと亮輔の方を向く。

亮輔「誰にやられた？」

理玖、再び視線が下を向く。

亮輔「お前なあ…！」

と、苛立たしげ。

亮輔の太ももに手を置き制止する真子。

真子「理玖？」

理玖、俯いている。

真子「…いじめとか…ない？」

理玖、首を振る。

真子「本当？」

理玖、頷く。

真子「…理玖。ママね、心配なのよ」

理玖、真子を見る。

真子「私も小さい頃、いじめられていたから」

○小学校・教室（朝）

※回想

生徒らの話し声でざわついている。

教室の最後列に座る高田太一（9）、

周りに集まる生徒らより身体が大きい。

太一「ちゅうもーく！」

と、立ち上がる。

シンとなる教室。

太一「飼育費はみんな知らないで突き通して

くださーい！言ったら殺しまーす」

と、キャツキャと笑い合っている。

周りの男子生徒「ご協力お願いしまーす」

× × ×

最前列の一番左の席に座る真子（9）、

俯いている。

目の前には先生が立ち、厳しい表情。

先生「お前なあ：飼育委員だろ」

シンとなる教室。

先生「黙ってちゃ進まないぞ〜？」

真子「…」

生徒らはクスクスと笑い合っている。

太一「こいつ犯人じゃねー？」

と、周りにしか聞こえない声量で。

真子M「分かっている。知らないといえれば済

む話。けど、喉の奥が熱くなって、すぐそ

こまで言葉がきているのに―」

洗平の声「それ高田くんですよ」

と、後ろの席の徳山洗平（9）。

先生「…高田？」

と、太一の方を見る。

太一、首を横に振るが動揺を隠せない。

真子、驚きの表情で振り返る。

洗平「…おれも飼育委員だし」

○体育館

体操着姿の女子ら、真子を囲んでいる。

女子A「なんで喋れんと？」

と、バレーボールをバウンドさせる。

真子M「いじめは起こる。子供は純粹で残酷だ。いつも無意識に標的を探している」

真子「…やっ…かっ…かえっ…！」

と、苦しそうな表情。

真子M「私たちのこの資質は、これ以上ないほど、格好の的だった」

女子B「イライラするー！」

洗平「なにしてんのー」

と、囲みに割って入る。

女子A「めんど」

女子C「関係ない人はどっか行ってー」

と、女子らは洗平を睨みつける。

洗平「それ返してあげたら？」

と、女子Bが持っている帽子を指差す。

女子B「やだー」

と、女子Aに放る。

洗平、瞬発的に駆け出し、その帽子を空中で奪い取る。

洗平「のろすぎ」

と、笑い、真子に帽子を渡す。

○運動場（夕）

上空からの映像。

生徒らが走り回っている。

真子M「わたしは無力だった。自分の身を守る体力も術もなかった」

走り回る生徒にズームアップ。

高田ら男子生徒が洗平を追いかける。

高田「あーもう無理」

と、息切れし、諦める。

真子M「私が今こうして生きているのは、ただ偶然にも、彼が隣にいたからでしかない」

※回想終わり

○マンション・佐々木の自宅・居間（夕）

真子「だからね。今度はわたしが、理玖を助けなきゃって。そう思ってる」

理玖「……うん」

と、笑おうとしているが、複雑な表情。

真子「よし」

と、微笑む。

真子「…徳山くんはね、なんで助けてくれるの？って聞いたのよ。なんて言った思う？」

亮輔「ママのこと好きだったから。とか？」

真子「違うわよ」

亮輔「ママは好きだったんじゃないの？」

真子「え？」

亮輔「そいつのこと」

真子「どうかな」

と、笑う。

亮輔「…」

真子「うそ。同窓会にも来なかったし、今何してるかは知らない」

亮輔「ふうん…」

と、疑惑の目。

真子「もう！脱線してる」

亮輔「ごめんごめん」

と、ビールを煽る。

真子「でね、さっきの答えだけど。おれ、無敵だから。だって」

亮輔「…え？」

理玖、目を見開き、真子を凝視する。

真子「面白いでしょ。足速いだけなのに」

と、笑う。

理玖「あいつも言ってた…」

真子「…え？」

○徳山の自宅・2階・自室（夕）

カーテンは閉め切っている。わずかな隙間から差し込む光に埃が舞っている。散らかった部屋の中央に置かれた椅子に座る洗平（34）、真上を見ている。

洗平「…：…よし：」

と、小さく呟き、椅子の上に立つ。

正面、ロープの輪の先、カーテンの間から丁度夕日が差し込み、眩しい。顔をしかめる。

椅子から降り、隙間を埋めようとカー

テンをしつかり閉じようとするが、どうしても隙間ができる。
ふと、その隙間から見える道路を見ると、今にも息絶えそうな老人がヨロヨロと歩いている。

洗平「…」

部屋の片隅を見る。視線の先にゴミの下敷きになっているダウンジャケット。

○徳山の自宅・外観（夕）

玄関から出てくる洗平。ダウンジャケットにシミのついたスウェットパンツ姿。婦人用のサンダルを履き、歩にくそう。

外玄関の門扉を開けたところで、背後の玄関扉が勢いよく開く音がする。

母の声「こうちゃん！？」

洗平、振り返ると涙目の母。

洗平「…散歩いってくる」
と、手を挙げる。

母「えっ…う、うん！気をつけてね！」

洸平「うん」

と、気まずそうに苦笑い。

門扉を閉め、右に行くか左に行くか逡巡し、右に歩き出す。

洸平「…最後の……だけど」

と、俯く。

○住宅街（夕）

下校中の小学生たち。

理玖、一人で歩いている。足元、石ころが転がってくる。

理玖「？」

と、後ろを見ると数人の男子小学生。

男子A「ささきー！パス！」

理玖、石ころをAの方に蹴飛ばす。

男子A「ナイスー！はいる？」

理玖「…あっ…あっ…！」

男子B「あ、フリーズした」

と、男子らは笑い、理玖を無視して石

蹴りを再開する。

理玖、顔を顰め、前を向き歩き出す。

姫花の声「あ、佐々木くん！」

と、恰幅のいい体型の中山姫花（9）
が走ってくる。

姫花「食べる？」

と、スナック菓子を手に持っている。

理玖「……う……う、ううん。いいや」

と、苦しそう。

背後で男子小学生らがコソコソ話して
いるのを気にするが無視して歩き出す。

○公園（夕）

長く伸びた遊具の影。

理玖と姫花、ブランコを漕いでいる。

姫花「今日の音読めんどかったよねー」

と、スナック菓子を口に入れる。

理玖「別にちゃんとできてたじゃん」

姫花「うーん、単純にだるかったっていうか」

理玖「……」

姫花「…佐々木くん。さっきの男子たち、気にしなくていいよ」

理玖「…は？」

と、怒気を含んでいる。

姫花「いや」

と、少し焦った様子。

姫花「佐々木くんが口にできないこと、私が代わりに言っただけのことでもできるしさ！男子とか結構弱いしさ、この前なんて

横田なんかー」

理玖「何様なん」

と、小さく呟く。

姫花「…え？」

理玖、ブランコを降りる。

姫花「ごめん」

と、ブランコを降りる。

理玖「あーもう…イライラする…！」

と、姫花を睨む。

理玖「ななっ…なんで！…おおお、お前みたいなデデ、デブに！同情されなきゃっ…い

けないの」

と、涙目。

姫花「…ごめんってば」

理玖「キモいんだよ！近寄ってくんない！」

と、姫花を突き飛ばす。

姫花、不意を突かれ、尻餅をつく。

姫花「…：うっ…」

と、涙が出る。

理玖「あっ…：」

と、動揺している。

背後から大きい影が伸びていることに気づく。

理玖「…？」

と、後ろを振り向くと、洗平が立っている。

洗平、理玖の頬を思い切り殴る。

理玖、殴られた勢いで姫花のそばに倒れる。地面に這いつくばり、恐怖と驚愕で動けない。

姫花「え？…助けて…」

と、恐怖で声が出ず、思い出したように震える手でスマホを洗平に向ける。

洗平、フツと笑い、理玖に近寄る。

姫花「来ないで！」

洗平、姫花を無視し、理玖の髪を掴む。

理玖「ななな、なんですか…！」

と、顔は赤黒く腫れている。

洗平「…いやー…うーん、まあ…」

と、首を傾げ。

洗平「女の子にそんな酷いこと言っちゃダメ

だよ…ほら…なんか、ダサイよね？」

理玖「…」

と、警戒している表情を崩さない。

洗平「…違うか」

と、失敗した、という表情で理玖の頭部を離す。

姫花、洗平にタツクルする。

洗平「うおっ！」

と、勢いよくブランコの周りの囲いにぶつかる。拍子にサンダルがぬげる。

理玖「おおっ、お前終わりだから！証拠とつ
てるから！」

と、姫花の袖を引っ張り、逃げる体制
になる。

洗平「どうぞどうぞ、お好きに」

と、笑い、立ち上がる。

理玖「…」

洗平「おれ、無敵だし」

と、脱げたサンダルをひっかけトボト

ボと去っていく。

理玖、ほっと一息つく。

理玖「…怖かった」

姫花「だね…警察いこ…」

理玖「…いや…」

と、考え込む様子。

姫花「…？」

と、理玖の顔を覗き込む。

理玖「ごめん。てか助けてくれてありがとう」

姫花「いや…でも確かにって思ったし」

理玖「そんなことない」

姫花「…」

理玖「うん…帰ろ」

姫花「だね…大丈夫？」

と、心配そう。

理玖「うん」

と、二人は公園を去っていく。

○街（夜）

街灯が灯り始めている。

サンダルを引きずり、トボトボと歩く

洗平。道の先にコンビニが見える。

○コンビニ・店内（夜）

洗平、おにぎりを二つ手に持っている。

コソコソと辺りを見渡し、店員の様子

を伺っている。

レジでスーツ姿の亮輔（後ろ姿で誰か

は分からない）が会計を終えたところ。

店員「ありがとうございますー！」

と、笑顔。

洗平「…」

と、ため息をつく。

○コンビニ・外観（夜）

自動ドアが開き、出てくる洗平。

亮輔の声「—わかったって、すぐ帰るから」

洗平、声のする方を見ると、亮輔がコンビニの窓下の段差に座り電話しており、目が合う。

亮輔、怪訝な表情。

亮輔「切るぞ」

と、スマホを操作する。

亮輔「おいおい、大丈夫かよ」

と、驚いた表情。

洗平「え？」

亮輔「世紀末じゃないんだから」

と、洗平は自身の格好を見ると、泥だらけのダウンジャケットにシミだらけのスウェット、婦人用サンダル。

洗平「まあ…無敵ですから」

と、少し恥ずかしそう。

亮輔 「なんなんそれ」

と、ふっと笑う。

亮輔 「ま、座れ」

と、場所を開ける。

亮平 「え、結構です」

と、去ろうとする。

亮輔 「いいから座れって」

と、しつこい。

亮平 「…」

と、渋々、隣に座る。

亮輔 「ま、人生色々あるよな」

亮平 「…」

亮輔 「食え」

と、食べかけのフランクフルトを渡そ

うとするが、ハッと気付き、

亮輔 「あ、新しいのがいつか」

と、焼き鳥のねぎまを渡す。

亮平 「いいんですか」

亮輔 「早く帰ってこいってお達しが来たから

食ってくれると助かる」

と、笑う。

洗平「なんかいいですね」

亮輔「いいことなんかあるか」

と、ビールを煽る。

洗平「羨ましいですけどね」

亮輔「…飲め」

と、ビニール袋をガサゴソあさり、酎

ハイ缶を渡す。

洗平「…どうも」

亮輔「ひとりの方が羨ましくなる時もある

ぜ？ってか、ずっと思ってる」

洗平「そうですか」

亮輔「息子も妻も、自分で決めて選んだ人生

だからアレだけど、何のために生きている

か分からなくなるって。そんなもんよ」

洗平「まあひとりでも、死にたくはなりません

けどね」

亮輔「そうかあ…」

と、二人で酒を煽る。

亮輔「酒はいい。なんでも薄まる」

と、酒を最後の一滴まで飲み干す。

亮輔「ま、おかげで中毒だけだな」

洗平「その場しのぎじゃないですか」

と、ふつと笑う。

亮輔「バカ。死ぬよりアルコール中毒の方が

ましだろ」

洗平「…」

と、ふと俯く。

亮輔のスマホが鳴る。画面には『まこちゃん』と表示。

亮輔「はー、ごめん！じゃな！」

と、立ち上がる。

洗平、ちよこんと頭だけ下げる。

亮輔「捨てといて！」

と、手を振り去っていく。

ビニール袋には、まだ食べてないホツトスナックと酒缶が入っている。

洗平、俯き肩を揺らしている。

